

専門演習における地域と連携した取り組み (3)

The nature activities in Satoyama for elementary school children in cooperation with Miyashiro-machi, Saitama Prefecture (3) – these activities are and what kind of influences they have had on the elementary school children and the university students –

田中 卓也
Takuya TANAKA

概要

共栄大学教育学部では、大学3年生から専門演習の授業が始まるが、これは卒業論文作成とそれに関わる活動である。その専門演習での活動で、埼玉県南埼玉郡宮代町と連携した小学生対象の里山自然活動を行っており、本年で4年目を迎えた。本稿では2017年度の活動と2015年から現在まで開始している「山崎山まつり」(「あそべんちゃーわーど」の秋編)がいかなる活動であるのか、児童や学生等にどのような影響を与えてきたのかについて迫るものである。またその際に、里山活動に参加した児童やゼミ学生、ボランティア学生にアンケート調査・感想文の執筆を実施し、彼等の声を拾い上げ、分析・考察を試みるものである。ここでは今回の活動の概要や内容を報告する。これらの作業を通じて、活動が専門演習にもたらす意義を考える。

キーワード：専門演習，地域連携，自然活動，新しい村，山崎山

Abstract

In the Department of Education at Kyoei University, the specialized seminar start in the third year. In the specialized seminar, the students start to prepare for their graduation theses and write them. They have had nature activities in Satoyama for elementary school children in cooperation with Miyashiro-machi, Saitama Prefecture for four years.

The purpose of this paper is to show what these activities are and what kind of influences they have had on the elementary school children and the university students. This paper includes analyses of the results of the questionnaire of the elementary school children and the university students who participated in the activities and essays about the activities written by them. This paper also reports the details of the activities and considers the significance of the activities for the specialized seminar.

Keywords: specialized seminar, regional partnership, nature activities, new village, Mt. Yamazaki

1. はじめに

本稿はこれまでに執筆した「専門演習における地域と連携した取り組み」(『共栄大学研究論集』第14号, 2016年3月)および「専門演習における地域と連携した取り組み(2)―宮代町里山自然体験活動を中心に―」(『共栄大学研究論集』第15号, 2017年3月)の続編であり、本稿で第3編となる。専門演習における地域連携活動についての意義と代替わりをした学生等の学びについて、検討するものである。なお研究対

象は専門演習の授業の一貫として行った里山自然活動およびゼミ学生・有志ボランティア学生であり、本年については田中卓也ゼミで実施した(なお以下の文章からは田中ゼミ, 兼古ゼミ, 小林ゼミと略記する。小林ゼミは2013年4月から2016年3月まで開講した。なお兼古ゼミは小林ゼミを引き継ぐ形で2016年4月から2017年3月まで開講した)。研究方法については、ゼミ学生および有志ボランティア学生へのアンケート、里山活動当日に実施した参加児童および保護者へのアンケート、参加学生の感想文より考察を行っている。

2. これまでの経緯

2.1 4年目を迎えた里山活動

大学内の専門演習の時間を使用し実施している里山自然体験活動は今年で4年目を迎えることになった。学生にも田中ゼミでは里山活動があることを認識し、さらに伝統というようなイメージが認められるようになった。また宮代町の公立小学校の児童においても、「毎年、共栄大学のお兄さん、お姉さんが夏と一緒に遊んでくれる」というイメージも同時に着くことになってきた。いまや宮代町の教育の一つの柱とさえ、いわれるまでになった。また里山活動を展開している宮代町内にある「新しい村」や「山崎山」についても学生等が事前に調査する目的で幾度も訪れることになるので、同地やその周辺地域のことについても地理的特徴などがおおよそわかるようになってきたといえる。

山崎山の入山には、かならず宮代町教育委員会(生涯学習担当の職員 主査の田中啓之氏 小林香織氏)の方に事前に連絡をしたうえで、入るといふ取り組み前からの規則があるため、学生等の代表者は自ら、教育委員会の方への連絡を入れ、それに応じて取り組んできた経緯がある。また入山時には、虫刺されが頻繁にあるため、虫除け材などによる処置をしっかりと行った。

2.2 里山活動でお世話になっている方々

この里山活動では宮代町教育委員会の方々ほかに、山崎山を指定管理されている「さいたま緑のトラスト協会」の代表を務める八木橋秀雄氏の力も大きい。八木橋氏は、元宮代町立前原中学校の理科教員であり、埼玉県環境アドバイザーにも就任されていることから、理科全般について専門とされている方である。里山活動はもちろん、町の児童、生徒を対象とした自然鑑賞会、ホテルの鑑賞、ツリークライミング講座など手がけているものが多い。昨年からは、同所を中心に「山崎山まつり」と称する、秋の自然体験活動を取り入れるようになり、これまで本学の田中ゼミ、兼古ゼミ(旧小林ゼミ)の有志学生らがその活動補助員として児童や町民の方々と積極的な交流を図った(今年度も10月28日に同会場で実施)。八木橋氏からは、里山活動の極意だけでなく、ゼミ学生の将来のことを気にかけて下さり、小学校教諭としての心得や授業のヒントなどをさまざまな指導をしてくださるところも大きな役割を果たしている。

また、2015(平成27)年より、里山活動の秋編として「山崎山トラスト祭」を開催することになった。主催は「里山守り隊」とよばれる「さいたま緑のトラスト協会ボランティア」の方々である。また共栄大学教育学部田中ゼミが開始以来4年にわたり、緑のトラスト協会との共催で開催していることも強調しておきたい。さらに宮代町環境推進担当の職員の方々(元生涯学習担当であった小林知弘氏など)によるサポート体制をとっている。

里山活動開始して4年になるが、共栄大学教育学部学生および執筆者らは、宮代町の多くの関係者の方々と接点をもたせていただくなかで、この活動に対して、さまざまな形でご支援ご協力をいただいていることを痛感している。今後も取り組むことになろうが、多くの方への感謝を忘れず取り組んで行かなければならない。

2.3 「新みやしろ郷土かるた」に詠まれている山崎山と新しい村

ここでは、里山活動で拠点となる「山崎山」と「新しい村」について「特集 山崎山の雑木林」(<http://search.yahoo.co.jp/search?p=>)に記載されている記事を中心に紹介しておきたい¹⁾。

自然の宝庫 山崎山 ▼は項目をさしている。

▼田園や屋敷林など、自然にあふれた環境と景観に恵まれている宮代町。東武動物公園駅から新しい村へ向かい僅か1kmのところには、豊かな自然が残る代表的な場所として「山崎山の雑木林」があります。

コナラやクスギなどからなる雑木林は、広さが約1.4ha。メジロやコゲラなどの野鳥や、カブトムシやショウリョウバッタなどの昆虫、ツリガネニンジンやウグイスカグラなどの植物が観察できる自然の宝庫となっています。

山崎山を守る取り組み

▼豊かな自然の残る山崎山は、県東部に残る貴重な雑木林として、平成12年に県のさいたま緑のトラスト保全地に選ばれました。翌年には、県と町で土地を取得し、あわせて町では「宮代町環境基本計画」を策定。山崎山の環境や景観を守り、学びや自然とのふれあいの場としても活かしていこうと、市民団体や県、町が連携しながら整備や保全活動などに取り組んでいます。

また新しい村の職員の方々の支援も大きい。それは「宮代マーケット計画」を説明する必要がある。同じく「特集 山崎山の雑木林」(<http://search.yahoo.co.jp/search?p=>)には以下のように説明している²⁾。

地域内自給を高め、自立性のあるまちを目指すとともに、生業を通して農のある景観を守っていこうというもので、そのためのシステム作りと販売拠点の整備を行うものです。

その一環として、平成12年度に町のほぼ中央にアンテナショップ結を設置（現在は閉鎖）し、そして「新しい村」内に本格的な直売施設「森の市場結（ゆい）」がオープンしました。

宮代町には、お米、巨峰、梨、野菜など、豊富な農産物があります。新しい村では、そんな自慢の農産物の販売の場として、またイベントなどを通じて町外の方へも広めていく役割を担っています。

「宮代マーケット計画」では「新しい村」を拠点として、地元で育てている野菜などを直売している店が、町民のいこいの場であるだけでなく、商品流通の場所でもあるとしている。そのことは「地域内自給を高め、自立性のあるまちを目指すとともに、生業を通して農のある景観を守っていこうというもの」が大きな目標に掲げられていることとも関連する。

さらに新しい村のホームページでは以下のように同所を伝えている³⁾。

宮代町を、そして新しい村を訪れた皆さんは、周りの風景を眺めて「田んぼばかりだな～」と思ったことはありませんか？

都会の人から見たらいわゆる「田舎」と言ってよい宮代町ですが、山や海のような自然はありません。宮代町にとっての自然環境は、水田や畑、農業用水路、農家の屋敷林など、人の手によって作り出されたものが「自然」であり、町の面積の半分を占めています。

こうした「自然」は農家によって維持管理されてきましたが、かつては5割近かった農家世帯も今では1割以下にまで減ってしまいました。

- ・農地は生態系、景観、災害、地産地消、教育、福祉など多くのものにつながって行く。
- ・「農地」は農家だけのものではなく、全ての町民に恩恵をもたらしている。

そんな考えを持ちながらも「宮代の自然」が減少していくことを見逃してきてしまいましたが、平成6年に宮代町の職員プロジェクトによる試行錯誤からスタートし、平成9年度には「農のあるまちづくり計

画」を策定し、町民の代表としての商店主、主婦、農家、そして役場職員がパネラーとなってシンポジウムをおこなうまでに発展しました。

これにより議論され計画の一部となったのが、「新しい村」のホームページに (<http://www.atarasiimura.com/noumachi/>)「農のあるまちづくり」をコンセプトに、「『田舎』と言ってよい宮代町ですが、山や海のような自然はありません。宮代町にとっての自然環境は、水田や畑、農業用水路、農家の屋敷林など、人の手によって作り出されたものが『自然』であり、町の面積の半分を占めています。

こうした「自然」は農家によって維持管理されてきましたが、かつては5割近かった農家世帯も今では1割以下にまで減ってしまいました」と、農業の復活を期待するものとして、行われている「新しい村整備計画」の一環のものであることがわかる。

先述の「山崎山」,「新しい村」については、宮代町の「郷土かるた」のなかでも詠まれていることは目を引く。2017(平成29)年3月に先代の「みやしろ郷土かるた」(1994年刊行)を20年ぶりに改訂し、「新みやしろ郷土かるた」が完成した。同かるたは宮代町という郷土を愛する子どもらを育てるために、町内の有名な寺院や仏閣、行事、小学校4校にいたるまで歌に読み込まれている。以下にその読み句や絵札を紹介したい⁴⁾。

山崎山の読み句

【題材】 山崎山雑木林

山崎山 自然を守る トラスト運動

【解説】

平成13年(2001年),さいたま緑のトラスト保全第5号地として,M町とS県が購入した雑木林。広さは1.4ヘクタール(東京ドームのグラウンド程度の大きさ)あります。たくさんの生き物や植物などの自然を観察・体験することができます。さいたま緑のトラストボランティア第5号地支部(里山守り隊)を中心に,保全活動も自然観察会が行われています。

新しい村の読み句

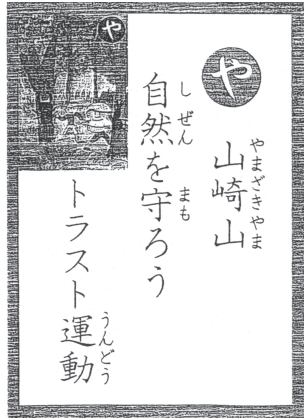
【題材】 新しい村

めぐりゆく 季節感じる 新しい村

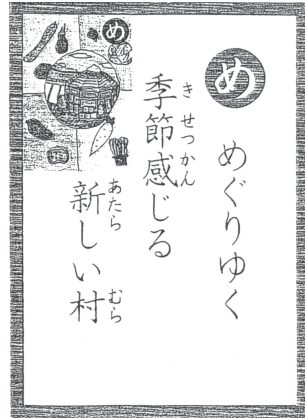
【解説】

宮代町のまちづくりのコンセプト「農のあるまちづくり」を象徴する施設として,平成13年(2001年)にオープンしました。地元産の新鮮野菜や特産品を販売する「森の市場 結」のほか,市民農園,ハーブ園,江戸時代の水田開発を今に伝えるホッツケ(一部復元整備)があり,小学生の稲作体験などに活用されています。

【写真1】・【写真2】の「読み札」や【写真3】・【写真4】の「絵札」に見られるように,「山崎山」や「新しい村」がかかるたに詠まれることになり,ますます町内の児童らにこの地名が浸透し,かるた熱も上がることになった。本年7月のかるた大会では,3人1組による合計80チーム(240人)が出場する大規模な大会にまで成長し,活気を呈したことが「広報みやしろ」などで報告されている。かるたのみならず,今後は里山活動にもますます影響することになれば,さらに活動そのものが賑わうことになると想定できよう。



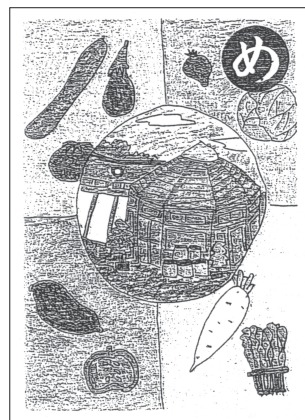
【写真1】「山崎山」の読み句かるた



【写真2】「新しい村」の読み句かるた



【写真3】「山崎山」の絵札



【写真4】「新しい村」の絵札

3. 活動の概要

3.1 2017（平成29）年度の活動

さて2017年7月30日（日）に第4回の里山自然活動が実施された。概要を以下に示したい⁵⁾。

活動名称：「里山を通した自然体験活動」（「あそべんチャーわーど」）

活動日時：2017年7月30日（日） 9：00～14：00（後片付けなどの時間も含む）

活動場所：新しい村・山崎山一带（埼玉県南埼玉郡宮代町字山崎 764）

協力団体：さいたま緑のトラスト協会宮代支部 株式会社新しい村

活動の目的：①子どもの主体的な集団活動による社会性の育成

②自然体験，創作体験を通した情操教育

③達成感を通した自尊感情の育成

④身近にある自然や人々とのふれあい，郷土に対する愛着心の育成

活動内容：①あいさつ・諸注意（実行委員長：田中ゼミ生，宮代町教育委員会 田中啓之）

②山崎山のお話（さいたま緑のトラスト協会宮代支部代表・八木橋孝雄）

③チームワークラリー（山崎山の中を散策）伝承あそび等

④フォトフレームづくり（山崎山の自然の木ぎれを使用しフォトフレームの製作）

⑤流しそうめん(宮代町の竹を切って利用)

参加学生:共栄大学教育学部(田中ゼミ22名,有志学生18名)

計:40名(当日欠席1名) 引率および総括責任者:田中卓也

関係者:宮代町教育委員会 生涯学習担当職員:田中啓之,小林香織(2名)

参加児童:宮代町内公立小学校児童40名(当日欠席1名)

2017年度の活動については,初開催時の2014年度から内容とはやや変わったものを取りいれている。それまでは竹楽器づくりをしていたが,音楽担当ゼミであった兼古ゼミ(旧小林ゼミ)が開講されなかったことを理由に,このたびは行っていない。その代わりになるものが,「フォトフレームづくり」である。これはゼミ学生からの発案によるものである。本学学生もはじめての取り組みであったため,先述したさいたま緑のトラスト協会の八木橋氏のご指導ご協力により,里山活動の1ヶ月前ごろから,ゼミの時間を使用し,模擬製作体験などを実際に行っている。なかなか製作に労苦を要した学生もいたが,練習した結果,なんとか児童に教えることができるまでになった。

また変更点としては児童数を50名から40名に戻している。少ない人数にすることでより児童を注視することができるというものであった。しかしながら実際には,7月1日の応募開始日には,開始数分で予定人数は埋まってしまった。それだけでなく受付の教育委員会事務局のすべての電話がパンク状況に陥った。教育委員会事務局の方から後日伺ったのであるが,パンクした際にも相当数の電話で申し込みが行われていたようで,電話がつかないことへのクレームさえ噴出したという。毎年のものであるが,申込状況はますます過熱しており,町内で人気のあるイベントの一つに数えられている。

また児童参加人数の40名への減員にもとづいて,有志学生のボランティアへの要請の応募も18名程度に変更した。その多くは田中ゼミの3年生,4年生の学生が個々に仲良くしている親友,友人らを探し出し,ボランティアの要請をした。

ボランティア学生対象の事前打ち合わせも,都合3回(7月6日の午前の時間,7月21日の午後の時間,7月28日の午後の時間)会場となる山崎山・新しい村周辺で行った。ボランティア学生も講義などの関係で指定された日時に来ることのできない学生も数名存在したようで,その学生に対しては里山リーダーが個別に行った。

またこの活動は田中ゼミと他ゼミの合同で行われていたが,今年度は田中ゼミ単独で行った。田中ゼミを中心に有志ボランティア18名により,本年の里山活動が開始されることになった。ボランティアについても事前準備などにおいて里山リーダーが中心になって現地の下見,事前打ち合わせなども行った。そのうえでの参加となった。

3.2 山崎山トラスト祭における活動

先述したが,2015(平成27)年より「山崎山トラスト祭」がスタートを切り,年に2度,本学学生らは活動を行うこととなった。【写真5】にあるように,主催は「さいたま緑のトラスト協会」の方々と町役場の「町民生活課」であり,先述の八木橋氏から筆者のへ事前にご相談も兼ねて支援を依頼されたのがきっかけであった。当初は手探り状況であり,実験的な意味合いもあったようだが,参加者から好評であったこともあり,現在まで継続している。

2015年から本年2017年までの3回の内容を見てみると,基本は「ツリークライミング」,「クラフト体験」,「里山体験コーナー(自然観察会や自然体験)」,「ドラム缶ピザ」の4つが開催されている。

ツリークライミングでは山崎山の森でロープをつかって木登りをおこなうものであり,体験時間は4回となっている。また各回の定員は8名までとなっている。費用については,参加者1人あたり500円と定められていた。参加者の多くは小学生児童であるため,クライミング直前に15分程度の簡単な講習が行われている。本学学生はツリークライミングの準備のお手伝いとして関連機器の装着等を補助することが多い。学



【写真5】「山崎山トラスト祭」告知チラシ (2017年10月1日 宮代町町民生活課・八木橋氏を中心に作成)

生に以前聞いたことあるが、「準備をしていると、自分も実際にツリークライミングをしてみたいくなる」という話だったが、気持ちはよく理解できる。ツリークライミング実践の様子をみかけたことがあるが、参加者はみな真剣な表情で講習を受けている様子であった。町民の方に人気なのは、クラフト体験であり、小さな切り株にいろいろな木の実をくっつけ、メモホルダーなどを製作し、製作後はおみやげとして家に持ち帰れることになっている。事前申込は不要であるため、多くの参加者が集うことになっている。

なんといっても児童に一番人気であるのが「ドラム缶によるピザづくり」であった。児童はもちろんであるが、家族や友人を誘って来場することも大変多く、盛況のうちに完売となることは頻繁である。ピザ製作であるが、ピザの生地づくりからはじめることになる。ピザ作りの先生（埼玉県加須市にて指導主事をされている方）による事前製作指導を受けて、作業に入ることになる。人気のあるこの活動は午前、午後の1回（1時間程度）ずつで計2回実施されている。1回の所要時間については、すべての行程をふくめおよそ2時間程度となっている。定員は1回につき15名程度であり、費用は200円となっている。ピザ作りを拝見する機会がこれまで何度かあったが、経費・値段ともにお手頃のものとなっているため、申込者からは好評であることは想像できよう。

【表1】にあるように本学学生は、このピザ生地作りの補助作業を行ったり、実際にドラム缶でピザを焼く仕事など、色々任されることが多いようである。見ていると、学生の表情は朗らかであり、ある意味「ピザ職人」になったかのような気分に伺える。大学の講義が中心であるなかで、このような体験活動を通じて成長する姿を見て取れる。学生の経験の少なさはいろいろとところで指摘されているが、この経験を通して、学生のみならず執筆者においても、あらためて経験の重要性を認識することになる。

山崎山トラスト祭は関係者のお手伝いとして参加しているものの、経験の少ない学生にとってはまさに経験を積む恰好の場所や機会となっている。内容については今後も検討されていくことになるが、学生主体の取り組みができる企画があると嬉しいのであるが、現状は開催側の諸事情などもあり、困難な状況にある。

表1 2017年度山崎山トラスト祭役割分担表

	体験内容等	必要なもの等
① クラフト体験 (随時体験)	・細い木を切ったものに、木の実や枝などをボンドで飾り付ける。 手助けはしないで、参加者の工夫や創造性を生かしやすいように進める。	筆記用具, ボンド他
② 自然体験 (時間設定) (下草刈りや丸太切り等)	・下草刈りの必要なことやその体験 ・間伐の必要なこととその体験 ・すでに切っている丸太を切る体験 ・時間の設定を行う (～時から体験実施)	のこぎり, 手袋 (革手袋), ヘルメット
③ 自然観察会 (1時間程度?) (林内散策・観察会)	・林内を散策しながら、昆虫や植物などの生態とそれらを取り巻く生態系について ・散策しながら里山と生物多様性について ・時間の設定を行う (～時から1時間程度)	資料? 虫網, 図鑑, 双眼鏡, テーブル?
④ ドラム缶ピザ (予約体験)	・1家族ごとに1枚 ・粉からはじめ、発酵、トッピング等を行う。 ・プラザ職員がドラムに入れ、焼き上がり後出す。	テーブル, イス
⑤ 展示 (常設)	・トラスト関係の様子をパネル等で展示をする。	トラスト活動の案内
⑥ ツリクラ (予約体験)	・インストラクターがはじめから最後まで進める。参加者の様子や、話を聞く。	受付は別場所?
⑦ 受付等 (案内・チラシ配布) (簡単なクイズ等) ※誘導・警護を含む	・受付をする。配布物があれば配る。 ・必要に応じて案内をする。 ・時間つなぎ的な簡単なクイズを実施する。 ・救急的な手当をする。	受付簿, テーブル, 救急箱, 簡単な里山クイズ等, 図鑑, クイズ景品, マイク, トラシーパー

3.3 里山活動取り組み前 (事前) アンケート調査から見えること

里山活動に取り組む学生等は、どのような思いでこの活動に参加しようとしたのか。参加学生全員を対象にして事前アンケートを実施した。アンケートについては、事前にボランティア学生が講義の関係上、全員が一堂に集合することが困難であったこともあり、里山活動5日前の2017年7月25日(水)と7月30日(日)の開始直前の2度実施することになった。昨年と同じ形式でA4 1枚のアンケートである。質問数は全15問であり、10問は選択式、5問は記述式で回答するものであった。選択式の回答については、「5段階」で評価されるものであり、「5」が「たいへんよくできた」、「4」は「よくできた」、「3」は「ふつう」、「2」は「ほとんどできなかった」、「1」は「まったくできなかった」というものである。

まずは選択式の問題の回答について分析してみると、里山活動の参加や意義については、ほとんどの学生が理解しており、意義についてももしっかり把握していることがわかる。参加人数の違いは見られるが、昨年の学生の回答と同じであった。また「里山活動が大学の講義になること」については、3分の2の学生が肯定しており、残りの3分の1の学生が講義化を否定している。昨年については、約半数の学生が肯定し、残り半数が否定していたため、肯定する学生の割合が増えたことになる。すなわち講義として里山活動が学生に受け入れられるようになったことを意味する。しかしながら実際に取り入れることになると、ゼミの時間だけではなく、通常の講義の時間などが割られることにもなるため、検討して行くには多くの時間を要することになる。なお講義のなかに里山活動が組み込まれている事例(岡山県高梁市に所在する吉備国際大学の「里山総合演習」など)もあるため、すこしの期待を持ちたいものである。

さらに「里山活動で学んだこと」については9割以上の学生が「多くのことを学んだ」と回答している。この事情も昨年のアンケートと変わらない回答である。

一方、「記述式」の回答については、アンケートの時間が不定期であったことから、多くの回答を得ることは難しかった。このことも昨年と同様の事情である。しかしながら「来年も行うことがのぞましい」とか「(ほそぼそとでもいいから)続けるべきであろう」、「里山活動の意義は十分ある」、「里山活動のすばらしさを子どもたちに伝えていくのが、わたしたち学生の役割」、「子どもと一緒にふれあうことができる里山活動

は大事」という回答も得られた。

3.4 里山活動取り組み後(事後) アンケート調査から見えること

里山活動後には、参加してくれた小学校児童および保護者を対象にアンケートを実施した。「小学校1年生～3年生」、「小学校4年生～6年生」、「保護者」のA4判1枚の3種類のアンケートを作成している。すべて田中ゼミ学生の案によるものである。それを教育委員会の生涯学習担当の方がチェックを入れるというものである。児童の回答はほぼ100%が「満足」と記述している。一方保護者については95%が「満足」と回答しているものの、のこりの5%は「やや満足」と回答している。また自由記述欄を見てみると、「もっと回数をふやしてほしい」とか「夏に2回以上やってほしい」、「毎月やってほしい」など機会を増やして欲しいという要望が多い。また保護者の回答は、「宿泊のある里山活動をお願いします」とか「家族で楽しめる里山」、「親子で参加できる里山活動」を回答する方が見られた。いずれにせよ現状のまま行う中で、もっとたくさんの機会が必要であることを企画する私達に求めていることがわかった。

3.5 学生の感想から

本年度も、里山活動終了後に、参加学生へ感想文をA4判1枚の範囲を指定し、書くよう指示をした。10月末を締め切りに、ゼミ学生(企画実行委員)および有志ボランティアあわせ40名の学生が提出してくれた。感想文を一読してみると「成功」、「今後の自分にいかせるもの」、「友情が深まった」、「児童との交流のよさ」のコメントが目立った。また「宮代町教育委員会」・「さいたま緑のトラスト協会」との連携によって成功したことへの自負や、お世話になったという記述も目立つものとなった。

しかしながら他にも感想を持った学生が多い。以下にその感想文を紹介したいと考えている。実行委員長であったSの発言である⁶⁾。

実行委員長としてみんなをひっぱってきたが、なかなかうまくいかないことも多かった。私はこのようなリーダーをするのはいままでの経験でそんなに多くはなかったから、自信がないといえようそになります。また大事なときにかぎって私が試験や就職活動で抜けることになり、ほかのゼミの仲間に随分助けられることがあった。仲間には本当に感謝している。私だけではこれだけの取り組みは決してできませんでした。また去年の先輩のようにやらなければという思いも正直ありました。でも先輩には正直追いつかなかったと思っています。でも、私なりにがんばったつもりです。比較しなくてもいい、自分らしくしたらいいのでは、と仲間から声をかけてもらったこともあります。そのことが私のしんどい思いを軽くしてくれました

「実行委員長としてみんなをひっぱってきたが、なかなかうまくいかないことも多かった。私はこのようなリーダーをするのはいままでの経験でそんなに多くはなかったから、自信がないといえようそになります」とSは正直に回答している。ゼミのなかでもむしろ支えていく立場であったSにとって、里山活動は大きな舞台であった。「教員採用試験に打ち込む他の学生のかわりに、私が必死にがんばる」という言葉を筆者は何度も聞いたことがある。他のゼミメンバーへの配慮・気遣いを感じさせる。

「去年の先輩のようにやらなければという思いも正直ありました。でも先輩には正直追いつかなかったと思っています。でも、私なりにがんばったつもりです。比較しなくてもいい、自分らしくしたらいいのでは、と仲間から声をかけてもらったこともあります。そのことが私のしんどい思いを軽くしてくれました」とも述べている。「去年の先輩」は、ほぼ一人で企画を運営したという学生であった。Sはその先輩に憧れていた。そのため先輩に少しでも追いつこうとしたのであろう。しかしなかなかうまくいかなかったことを吐露している。しかしSは「仲間から声緒を掛けてもら」ったことで、「私のしんどい思いを軽くしてくれました」と述べていることから、人と比較するのではなく、自分らしくやりきることに目標を変更したのである。そ

れがうまくいったとふりかえっている。

またボランティアとして参加した学生はどのような感想を持ったのだろうか。次に4年生Tの感想を見てみたい⁷⁾。

昨年も経験したが、やはり参加してよかったと思っている。また実際の活動場所も事前に訪れることで、しっかり当日望めると思った。昨年は現地に下見に行ったものの、心のどこかで「なんとかなる」と自負していた。しかし実際に子どもたちを前にしたら、無力。仲間を見てみると、なんと順調にやっている。正直くやしい思いがあった。会話するだけで精一杯であったことが今でも思い出される。あのことを繰り返してはいけないと今回は参加前から気持ちを高めた。実際にはじまってみたら、下見に行ったことと気持ちを高めることで昨年の失敗のことなどうそのようだった。子どもたちと楽しく接し、フォトフレームづくりも一緒に行うことができた。正直自信はないけど、子どもが楽しめたらそれでいいと思った。そのあとのソウメンはうまい。

自分が食べることよりも、子どもたちがたくさんのソウメンを必死に食べる場所を見ていたら、たまらなくなうれしくなった。気付いたらすでに終わっていた。なんかむなしくなった。もう里山をすることがなんいだなあ……。こんなことならもっと里山を満喫したかった。でもこのあとは小学校の先生になって実現させたい

有志ボランティアTの感想文である、昨年参加しているTは昨年の失敗を繰り返さないように、事前に自分のなかでしっかり目標を定めていた。「あのことを繰り返してはいけないと今回は参加前から気持ちを高めた。実際にはじまってみたら、下見に行ったことと気持ちを高めることで昨年の失敗のことなどうそのようだった。子どもたちと楽しく接し、フォトフレームづくりも一緒に行うことができた。正直自信はないけど、子どもが楽しめたらそれでいいと思った」とあるように、順調にボランティアとして活動していることを誇っている様子である。「気付いたらすでに終わっていた。なんかむなしくなった。もう里山なんいだなあ……。こんなことならもっと里山を満喫したかった。でもこのあとは小学校の先生になって実現させたい」と述べるTは、この里山活動で自信を取り戻すことができた。里山でできなかったことを小学校の先生になってから実現させようという強い意欲があらわれている。

感想を述べた二名ともに、自信がないところからスタートであったが、「経験が命」であることを実感している。里山活動の経験は、普段の大学生活では味わうことのできない有意義な体験であり、将来にいかせる大切な宝物として彼等には映ったのであろうか。そして仲間の存在も大きい。友人に励まされ、また友人を意識することで、がんばらないといけないという強い気持ちをもたせる体験であった。

4. 取り組みにおける今後の課題

今年で4回目の実施となった里山自然体験活動「あそべんちゃーわーど」は、本学教育学部学生と宮代町教育委員会の方々、NPO法人さいたま緑のトラスト協会の協力支援のもと、無事に迎えることができた。

今思えば、「あそべんちゃーわーど」は、筆者のゼミ学生はもちろんのこと、宮代町に在住する多くの方々を支えられてきたことが大きい。また「あそべんちゃーわーど」実施前からの宮代町教育委員会と地域の児童、保護者との信頼関係の強い基盤の上に成り立っていたことを改めて実感させていただいた。「あそべんちゃーわーど」は、これまでの4年間にわたる実施において、児童の応募が殺到するという事態を招いている。年々応募数も増えていることから、参加することさえ難しい状況を迎えているのは否定できない。しかしながらこのことは児童から愛され、期待をもたれているという裏付けにもなっていることを紛れ

もない事実であろう。

本年度においても、宮代町教育委員会が設定した40名定員の申し込みは、あつというまで一杯となり、地域に住む児童とその保護者の方々には昨年に続き、選に漏れる児童が出ている。それでも児童や保護者からは「1年に1回だけでは寂しい」であるとか、「2回、3回実施してほしい」、「四季に応じて実施したらどうか」などの声を聞くようになった。このことが本学学生のやる気に直結しているのだと考える。

本学学生はこれまで熱意をもって取り組んだ。開始以来一貫して、教員が用意したものではなく、学生自らが企画立案し、構想を練っている。学生からはきっと面倒な準備・活動に思えるかも知れない。しかしながら、この面倒な経験こそが、現在の学生らが苦手としているコミュニケーション能力の向上や、リーダーシップの具備、協調性の構築につながるものであると感じている。「ウオークラリー」や「流しそうめん」といわれる定番のメニューとこの度新しく採用した「フォトフレームづくり」で今回活動してきたことも、すべて学生等主導で行い、頭を突きあわせて議論した終着点であった。

学生等は事前アンケートにおいて、「企画は楽しみであり、児童と関わることがいまから待ち遠しい」とか「講義の一環にするのもよいのではないか」という大方の回答を得た。このことは4回目の開催で初めてのことであった。開始当初は学生等の自信のなさが明確に示されているのではないかと感じることも多かった。しかしそのような学生においても里山活動の重要性が少しずつ伝わりはじめているのではないかと感じるようになった。定期的続けることに意味があるのである。そのため「あそべんちゃーわーど」の「秋編」という意味で「山崎山トラスト祭」も実施するようになった。

里山活動など自然体験をメインとする企画に対し、自信のなかった学生等が、実践してみると、学生感想文にもあるように、「成功に導けてよかった」、「児童とたくさん話げできた。コミュニケーションも十分取れるようになった」とか「最初は半信半疑の気持ちであったが、途中から前向きの気持ちで望めるようになった」と回答するように、自信に変わっている。やはり「経験こそ力」なりということなのであろう。経験することで、彼等はまた教師への階段を一步ずつ昇っているのである。だからこそ、里山自然体験活動は彼等にとって有意義なものなのである。また企画の成功はもちろんであるが、なんと言っても学生の普段見せない真剣な姿、本気で自然体験を楽しもうとする姿勢、そして学生とともに活動した宮代町内の小学校児童等の無邪気な「笑顔」を見ることが、本当にうれしい。執筆者は感想のところでも書いたが、この風景（を見ること）が毎年たまらなくうれしい。だから里山自然活動は、長期間にわたり、大変手間が掛かる作業であるが、やめられないのである。

里山活動後には、かならず参加学生と教育委員会、八木橋氏で「反省会・ふりかえり」を1時間程度行っている。参加者全員にその場で感想・反省について発言してもらっている。参加児童とどのように関わったのか、どのような工夫が必要であったのか、など里山活動そのものの反省もあるが、彼等が将来小学校教諭になった際に、里山活動をどのように運営していくべきなのか、などについても学べる機会として用いている。小学校の現場でもこのような活動を行うところも少なくないからである。発表者や町教員委員会の方々、八木橋氏においても、良い所はしっかり認めながらも、改善点などについても彼等に理解しやすいように懇切丁寧に指導している。このスタイルは4年目になる現在でも一貫している。この反省会の意味が大きいことは参加学生は誰もが感じているにちがいない。

しかしながら成功の裏で、課題もいくつか見えてきた。つねに参加スタッフの数が安定しているとはかぎらない。場合によっては、スタッフの人数が多くななくてもできる方法を工夫することが必要である。数が集まらなければ獲得募集に努めなければならない。この問題は毎年抱える問題のひとつである。

さらに教育委員会側のスタッフがいつも常置することも難しい。本年度は、これまで生涯学習担当という立場で関わってこられた方が異動となり、新しいスタッフが担当することになった。その方に以前お話を聞いてみると、「とまどいもあったが、わからないことは先輩の方に教えていただきながら、なんとか間に合わせた」と述べていた。新しいスタッフの方にも戸惑いがあったようだが、この企画を成功させるため、必死になって取り組んでくれたことを意味するものと感じる。お忙しい中、本当にありがたい思いで一杯である。

次代に受け継ぐ形で、新たなスタッフの養成においても力を注がなければならないであろう。学生については、参加する子どもらへの細かな配慮、声かけなどがそうである。まだまだこのあたりについては極めて経験が少ない。また咄嗟の出来事や予定変更に対処できない、という点も見逃せない。児童も人間であり、「生物(なまもの)」である。学生等の予想以上にいろいろなことが起こる。あらゆる事象に対応できるだけの力と、慌てずに落ち着いて対応できる力が学生らに求められることは必至である。

さらに企画の単一化の問題も避けられない。里山でできる新たな自然体験プログラムについても検討していかなければならないであろう。またマンネリ化を防ぐことから、山崎山に変わる他の場所の検討も考える時期にきているのではないかと考える。今後の課題を列挙しながら、次年度に継続できる里山自然体験活動になるよう、祈念してやまない。

「里山活動の授業化」は毎年話題として浮上する。授業化実現には相当の時間がかかることは必至である。たとえこの活動が授業化されないまでも、里山活動の継続化は参加学生は全員認めているところである。5年目を迎える来年にむけて、後輩達を中心となり、さらなる準備、企画をしっかりと行うことが望まれる。

註

- 1) “特集 山崎山の雑木林”，入手先〈<http://search.yahoo.co.jp/search?p=>〉，(参照 2017-11-2)
- 2) “新しい村ホームページ”，入手先〈<http://www.atarasiimura.com/>〉，(参照 2017-10-29)
- 3) 同上
- 4) “新みやしろ郷土かるた完成”，入手先〈<http://www.town.miyashiro.lg.jp/0000005222.html>〉，(参照 2017-10-23) 同サイトには次のような説明がある。
「小学生を中心に、郷土教材として親しまれている「みやしろ郷土かるた」を全面改訂しました。初代かるたの制作(平成7年)から約20年ぶりの改訂となります。新かるたの制作は、公募住民などからなる「新みやしろ郷土かるた制作委員会(10名)」を組織し、平成28年6月から制作をスタート。読み札、絵札、名称の制作に、町内の小・中学生など、延べ約4200人が参加し、読み札に約6000点、絵札に約1600点の作品が集まりました。制作委員会による選定を経て、読み札、絵札とも、選りすぐりの46作品が決定しました」と紹介されている。筆者は、2016年5月から2017年3月までの期間において、「郷土かるた製作実行委員長」を務めた経験がある。
- 5) “里山を通じた自然体験活動(あそべんチャーわーど)2017年活動企画書”，(田中ゼミ学生4年生実行委員長S作成 2017-6-30)
- 6) “実行委員長Sの感想文”，(参照 2017-9-10)
- 7) “有志学生ボランティア4年生Tの感想文”，(参照 2017-9-20)

引用・参考文献

- ① “里山総合演習ポートフォリオ”(吉備国際大学心理学部子ども発達教育学科)，(参照 2017-4-30)
- ② 上田憲嗣, 栗田喜勝, 寺見章, 加藤博仁, 中野明子, 上田豊, 小池源吾, 秀真一郎, 藤井伊津子, 雲津英子, “体験型授業科目「里山総合演習」の教育効果の検証—オーセンティック・アセスメントと身体活動量に着目して—」『吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系』, 岡山, 吉備国際大学, 24号, 2014, pp.125-134